二〇二〇年四月一日（参加者二三名）

春塵を撒き散らし犬尾を振りぬ　智恵子
目刺焼く煙の出ないオーブンで　明日香
目刺焼く七輪囲みコップ酒　よう子
目刺焼く単身時代懐かしき　かかし
春塵や並ぶ宮居の道具市　わかば
道の駅目刺振る舞ふ割烹着　よう子
一連の目刺の顔のみな同じ　うつぎ
春埃夫の遺せし地球儀に　みづき
煙たいと文句言ひつつ目刺焼く　明日香
黒潮の風に痩せゆく目刺かな　やよい
今風にレモン汁掛け目刺喰ふ　せいじ
見開ける眼にも春塵仁王像　はく子
春塵や造花の供花の色褪せて　素　秀
料亭のシメに目刺と釜飯と　もとこ
櫓門手斧の痕の春埃　うつぎ
戻りきし猫のお髭に春埃　こすもす
門仁王力こぶにも春埃　菜々
風に乗るタクラマカンの春の塵　よし子
船旅や浜の土産に買ふ目刺　みづき
晩酌は薩摩白波目刺焼く　うつぎ
春埃置きっぱなしの子規全集　よし子
目刺し焼く尻尾は焦げてなくなりぬ　はく子
昨今は目刺しといへど高級魚　ぽんこ
ワイパーに涙走りすの春埃　隆松
春塵のアルバム繰れば懐かしき　満天
目刺し焼く私は頭食べない派　董雨

WEB句会みのる選・二〇二〇年四月一日